2022年9月28日　新聞記事

人道目的の地雷除去支援の会(JAHDS)関係者と支援者の皆様へ

9月28日付け日経新聞朝刊のぐるなび創業者　滝　久雄　さんの「私の履歴書」に私共の地雷除去活動が紹介されました。

■出会い

ちょうど今から20年前に、当時は危険なカンボジアで活動していた英国NGOの後方支援活動をするために年間の半分は現地入りして過酷な活動を4年半続け、ついに過労と腰痛のために3ヶ月寝たきりになった時に滝氏の著書と出会いました。

寝たきりの時にすべてを見直し、地雷除去は手段であって、目的はその地域の文化の再生と経済復興を推進することに気付きます。さらに地雷は国境沿いにあり、インフラが整い安全なタイ側で地域住民を雇用して地雷除去チームを立ち上げて、タイに進出しているJAHDS支援の日本企業の協力も得られることも分かりました。まさに後方支援から直接支援活動へのターニングポイントとなりました。

■ピースロードプロジェクト

南アから地雷除去エキスパートをスカウトし公募した地域住民はタイ政府の協力で地雷除去員のトレーニングを受けて育成し、プロジェクトリーダーには当社の小池豊取締役（当時）が常駐し2年の準備期間を経て、まず、地域復興の貢献性が高いカンボジアとタイ国境の物流マーケット周辺41万平方キロ(甲子園球場10個分）に成功します。

くしくもアンコールワットよりも古いクメールの大遺跡が国境沿いにあり紛争時はクメールルージュの要塞となり周辺には地雷が残留しているものの対立するタイ・カンボジア軍では地雷除去が困難な状況でした。

2004年にタイ・カンボジア政府の合意により大遺跡周辺の地雷除去が開始されることになり、中立的な地雷除去NGOの我々JAHDSがタイ政府の依頼を受けタイ側の国境周辺の地雷除去を実施することになりました。

我々の目指している地域文化の再生と経済復興、さらに戦いによって亡くなった多くの人々の鎮魂の思いも込めて「ピースロードプロジェクト」とネーミングしました。

多数の個人・企業・団体と政府からの支援を受け、2年がかりで甲子園球場27個分の面積を浄化し、タイ王室の方々にお願いして、現地の人たちによるNGO「PRO」を立ち上げ「JAHDS」の活動を継承しました。

2008年にはついに「幻の大クメール遺跡」は世界遺産に登録されました。

■貢献心は本能の覚醒と感謝

まさにピンチで出会った一冊の書籍が私の「貢献心は本能」であることを覚醒してくれました。

あらためて、地雷除去NGO【JAHDS】の活動を支えてくれた関係者そして支援者の皆さん、本当にありがとうございました。

地雷探知技術は「スケルカ」として進化し国内だけでなく海外でも人の命と暮らしを守る「減災」事業を通じて貢献していますことをお伝えさせていただきます。

日本経済新聞　2022年（令和4年）9月28日（水曜日）

私の履歴書

滝　久雄

㉗

「他者のため」は人の本能

自著出版、各界から反響

貢献心

光ファイバー通信の先駆的研究者で、東京工業大学の学長も務められた末松安晴先生と、「貢献心」について議論したことがある。

自分を他者のために役立てたいという貢献心が「誰にもある本能」との私の主張に対し、先生は「普遍的なものではない」と反論。結論に至らなかったが、後日、「君の説は正しいかもしれない」という手紙を頂いた。尊敬する末松先生の言葉はとても嬉しかった。

前に触れたが、中学時代に友人の兄の死に遭遇し、私は虚無感を味わうようになった。「一生懸命に頑張ってもしょせん人は死ぬ」と。これを脱したのが三菱金属時代だった。同僚の本を何気なく手に取ると、「人は後世に対して義務こそあれ権利はない。前世に対して権利こそあれ義務はない」という一節が目に入った。

自分が広く影響を及ぼす相手を「後世」と捉えるなら、人は後世を守る義務、言い換えるなら使命を持っているのではないか。これからは後世に尽くす使命感をもって生きようと考えた。不思議なことに使命感に目覚めると、長年の虚無感がウソのように消えた。

36歳の時にがんと疑われる難病にかかった時、私は自分の内にある使命感を再確認した。湧いたのは病に対する恐怖でなく、「残された時間で妻子や社員のために何ができるか」「自分を何かに役立たせたい」という感情だった。

その後、この使命感は人間が共通にもつものではないかと考え、哲学の道にいる人たちと議論を重ねた。たどり着いたのが「貢献心は人間の本能」という哲理。2001年、著作「貢献する気持ち」を紀伊国屋書店から上梓した。

人間は他者のために行う行動を「美徳」と考えがちだが、私は持って生まれた「本能」と考えた。ビル・ゲイツが財団を作って巨額の寄付をするのも、震災復興で多くのボランティアが活動するのも、すべて「他者に尽くしたい」という本能に根差すもの。助け合うことでしか人類が存続できなかったという歴史的事実もある。

本の出版は思わぬ反響を呼んだ。日本哲学会の元会長の加藤尚武さんは「現代倫理学事典」を改訂する際に、私の哲理を紹介して下さった。08年3月に英語版、09年10月には中国語版も出版され、記念講演を北京・清華大学で行った。

貢献心についての著作は英語版、中国語版も出た

出版直後、拙著を読まれたJR東日本初代社長で、当時相談役の住田正二氏は交通新聞の書評で「倫理学、哲学の生きた教科書」とし、「滝さんは儲かりさえすれば良い、という気持ちでやっている事業は一つもない」と書いて下さった。

文中の「貢献心に基づく行為は、義務というより権利」という言葉に、「目からうろこ」という手紙を送って頂いたのは、当時、東大生産技術研究所の教授でカオス理論の第一人者、合原一幸先生だった。

この本を何度も読み返し、会いに来て下さったのがジオ・サーチ（東京）創業者の冨田洋さん。地中構造物の透視技術を持つこの会社は、カンボジアで地雷除去の後方支援ボランティア活動をしていたが、過酷な環境での危険な活動で冨田さんは病床に伏し、そこでこの本と出合った。

私と話して「かわいそうだから助ける」のではなく、「自分の得意技を生かし、役に立ちたいという本能に基づく行動」だからこそ、ワクワクドキドキできると気付いたという。それからは「貢献心は本能」に賛同する多くの企業・団体・個人の協力のもと地雷除去チームを立ち上げ、NGO活動を再開した。

（ぐるなび創業者）

日本経済新聞　9月28日

私の履歴書　滝　久雄㉗「他者のため」は人の本能